

1994年9月11日

## 平安京左京六条四坊十一町

発掘調査現地説明会資料

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所在地 京都市下京区五条通河原町西入本覚寺前町805他

調査期間 1994年4月28日～同年9月末（予定）

調査面積 370㎡

### 1. はじめに

この調査は、建物の建設工事にさきがけ京都市埋蔵文化財調査センターが遺跡の有無を確認するため、工事範囲内に4箇所の小規模な調査区を設定して試掘調査を実施しました。その結果南の調査区で近世・中世・平安各時代の厚い遺物包含層が確認されました。特に平安時代の遺物包含層は池状湿地で、園池か流路の可能性があり、河原院に関連するものと考えられたことから、京都市埋蔵文化財調査センターが本調査の必要があると判断し、協議の結果、当研究所が発掘調査を実施することになりました。

調査地は平安京の東南に位置します。条坊で表示しますと左京六条四坊十一町となり、具体的には五条大路の南、六条大路の北、東洞院大路の東、東京極大路の西に囲まれた範囲（その範囲を通常「坊」と呼びます）を16等分した11番目の町にあたります。さらに調査地の位置を細かくみますと十一町の北東隅になります。

調査地周辺は、六条四坊四町には時康親王（光孝天皇）の御所釣殿院、同四・五町には『拾芥抄』東京図によると六条院、『延喜式』付図によると六条院融公など天皇・皇親家・有力貴族層の御所・邸宅などが建ち並んでいた一帯にあたります。当地は、文献より平安時代前期から中期にかけて左大臣源融（嵯峨天皇皇子）の河原院がありました。河原院の範囲は『拾芥抄』東京図や『延喜式』付図では十三町だけですが、その後十一・十二・十四町を加えて四町の範囲になったといわれています。河原院は『今昔物語』巻27に源融が邸宅内で塩釜をつくり、海水を運んで塩焼をおこなったことがみえ、有名となっています。融の死後、河原院は融の子昇から宇多上皇に寄進され、さらに上皇は僧仁康（昇の子）に命じて寺院としたといわれています。その後久寿二年（1155）、平治元年（1159）、建

仁二年（1202）などの度重なる火災や鴨川の洪水により次第に荒れはてていきました。このように当時の面影が消えうせても貞治三年（1364）、応永二七年（1420）の2回河原院で田楽祭りが催されており、敷地の名はとどめていたと考えられます。当地の北側十町（現在の町名では下鱗形町）は、『百鍊抄』にみる安元三年（1177）四月二八日に起こった有名な「太郎焼亡」の出火地点といわれ、具体的な火元はこの町か周辺の舞人（または病人）の仮屋であったといわれています。そうしますとこの時期には十町を中心として町場が形成されていたことになり当該地にもあった可能性があり、この有名な火災が及んだ可能性は十分あると思われれます。室町時代以降の当該地の状況については十分にはわかりませんが、当該地と麩屋町通りを挟んだ向かい側に「朝日神明宮」があります。社伝では元龜三年（1572）に丹波国穴太村から現在地に遷座したといわれ、当時の境内域は六条坊門小路付近を南限とし、北を松原、東は河原町、西は万里小路にまで及ぶ広大な範囲を占めていたといわれています。そこは「幸神の森」と呼ばれる木々が生い茂った森であったようです。江戸時代には当該地周辺は町屋であったようですがその詳細については不明です。以上のようなことから当該地にはこれらに関連する遺構群の存在が予想されました。

## 2. 発見された遺構

敷地内の土の堆積状況は、近・現代の整地層が60cm、元治元年の大火による火災層が40cm、江戸時代前期から後期にかけての最低2回の洪水層をはさむ整地層が40cm、安土桃山時代から江戸初期の整地層が10cmとなり、それより下は宅地部と道路ではやや異なります。道路部では室町時代前期の整地層が20cm、鎌倉時代の整地層が10cm、以下平安時代の路面の整地層が4面ほどあり、以下は砂礫層となります。宅地部では室町時代の耕作土が約25cm、その床土が10cmとなり、その下は砂礫層となります。調査は洪水層を除去した後、開始しました。以下調査の進行に従い主要な遺構群について報告します。

### ①江戸時代

町屋に関連する遺構群が調査区全域で認められました。それらは調査区北側で認められた東西溝16・79により二分されています。溝は石組で護岸され一部杭と板で補強されていました。溝の石組は作り替えがあり、18世紀前半と19世紀とに各々作られました。それ以前には素掘りのものがあり、成立年代は17世紀前半まで遡れます。明治の地籍図によりますとこの溝が描がかれ、河原町まで通じていた排水路であったことがわかります。そうしますとこの溝は麩屋町に面した町屋と六条坊門に面した町屋の境にある背割溝の性格を有した溝と考えられます。麩屋町に面した町屋では宅地奥に集石遺構、板組土壇、方形土壇

があり、集石遺構は東西に一直線並んで認められました。背割溝に接した土壌からは多量の土製の土鈴、小壺、小鉢が出土しています。六条坊門小路に面した宅地の奥には石組井戸が3基南北にあり、それより道路側には木枠組の井戸が2基南北に並んであり、場所によって井戸枠の素材が異なります。

#### ②鎌倉時代前半から室町時代

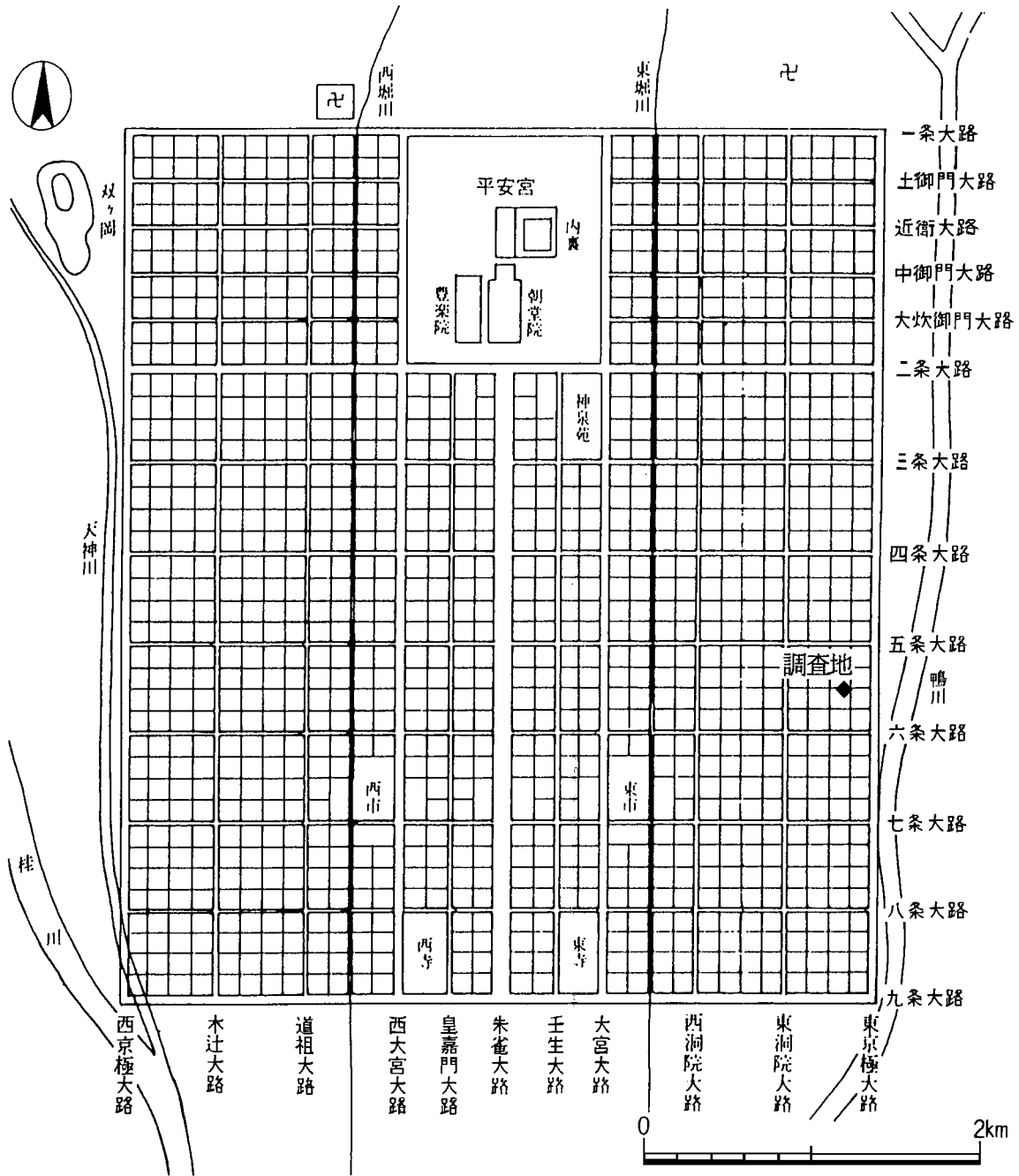
六条坊門小路については北側溝は鎌倉時代前半までは存続しましたが、それ以降は明確な溝は認められませんでした。北側溝は幅1.2m、深さ45cmを測る断面逆台形の素掘り溝です。南側溝は江戸時代の遺構群によって破壊を受けたためか発見することができませんでした。溝が埋まった跡も路面の整地土が認められることから、道路として使用されていたようです。北築地に相当する部分には東西方向の柱列が認められ、なんらかの施設があったようです。また六条坊門小路より南の十一町の北辺では、井戸、集石遺構、土器溜、柱列、方形土壌、土壌などが認められ、宅地利用がされていたことがうかがえます。

#### ③平安時代末から鎌倉時代初頭

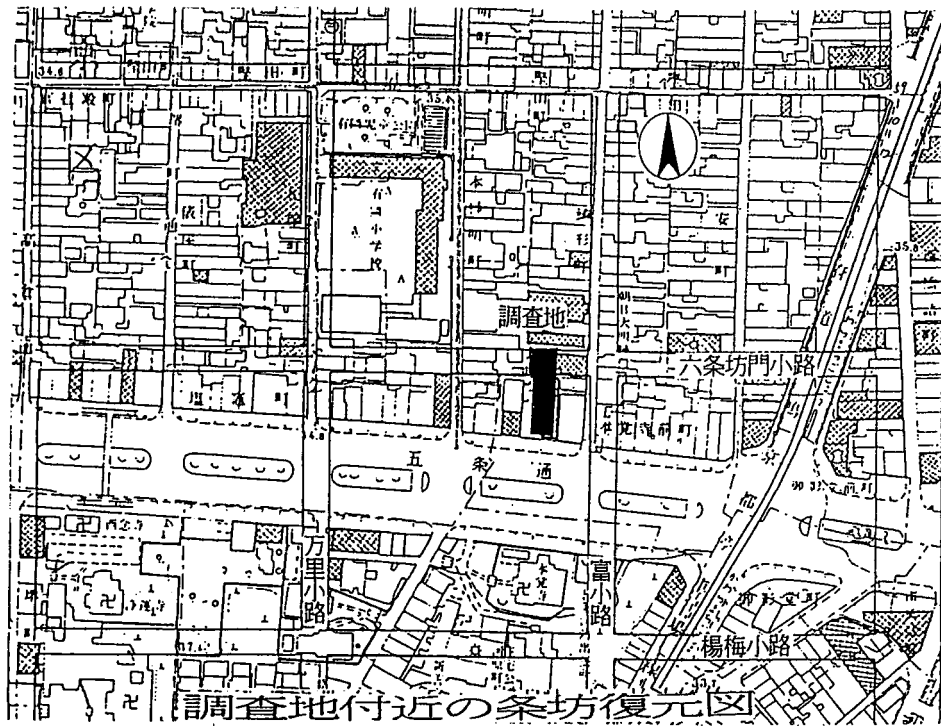
六条坊門小路については路面の整地土が確認され、北側溝の位置は、鎌倉時代前期のものやや前後して重複してあり規模などははっきりしませんが、少なくとも2時期認められました。南側溝は鎌倉時代以降と同様はっきりしません。北築地に相当する部分にも東西方向の柱列が認められます。十一町の北辺では、掘り形の一边が2.0~2.5mの隅丸方形の井戸が2基重複してあり、方形縦板組の井戸枠が微かに残っていました。井戸279井戸枠内底には曲物が据わっていました。

#### ④平安時代前期から後期

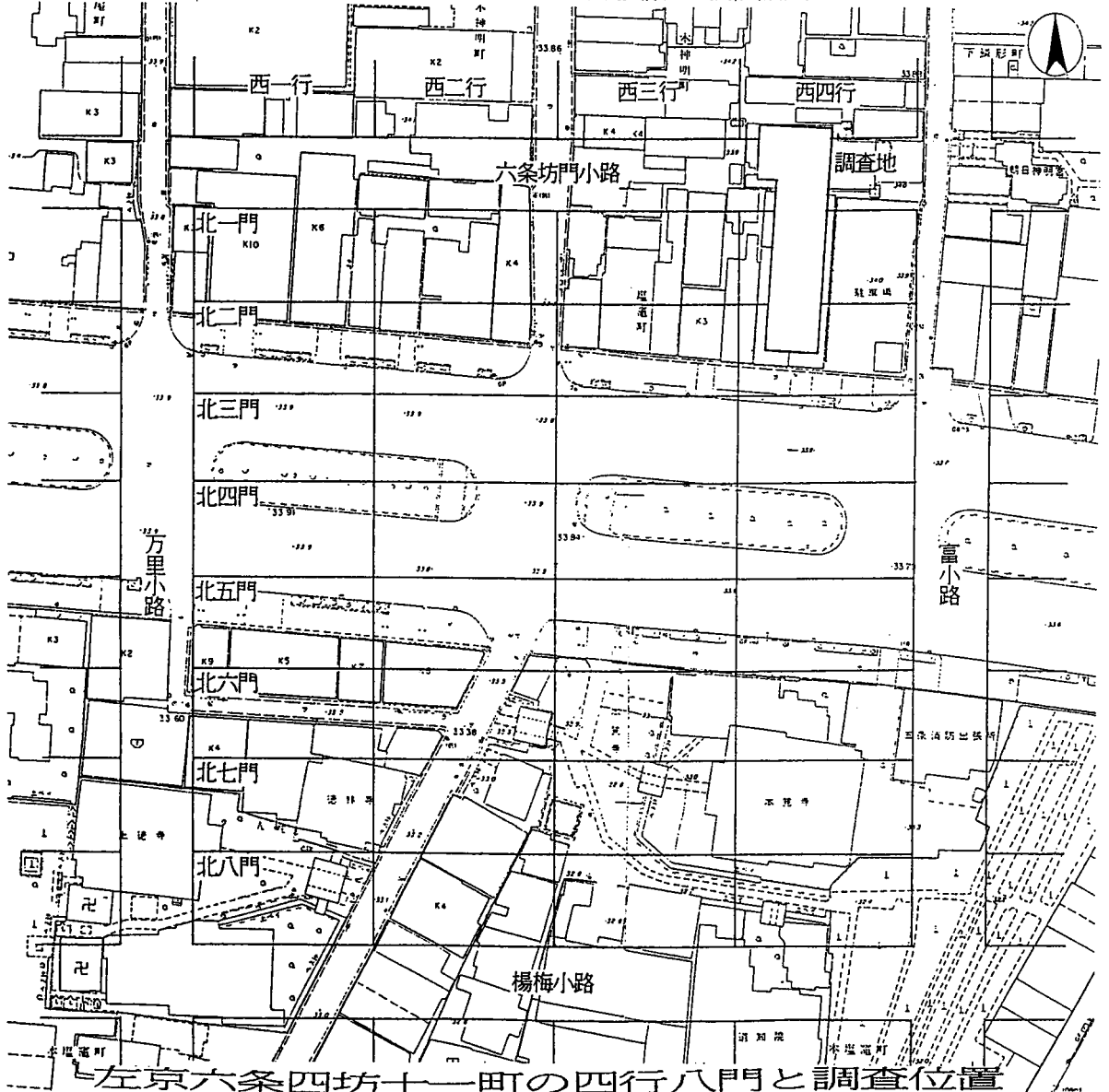
六条坊門小路については路面が4層程確認できます。北側溝については、この時期のものはみられません。これはなかったのではなく後の時期の溝と重複していた可能性があります。南側溝については、僅かにその痕跡と思われるものがあり、9世紀前半の遺物が出土したことからこの時期に道路として機能していたと考えられます。十一町の北辺には、幅10m前後、深さ95cmの東西方向の池状遺構があります。遺構の埋土は上部が35cm程の砂礫層があり、洪水により埋まった可能性があります。下部は65cmほどの泥土の堆積があり特にその下半には松・桃などの種子や葉・枝などの植物遺体が数多く認められます。このような堆積状態から明らかに水が溜り、湿地化していたと考えられ、これが河原院に関わる池の可能性があります。肩部には汀線に相当するような石敷施設や洲浜、景石などは確認されないことから更に検討する必要があると思われます。



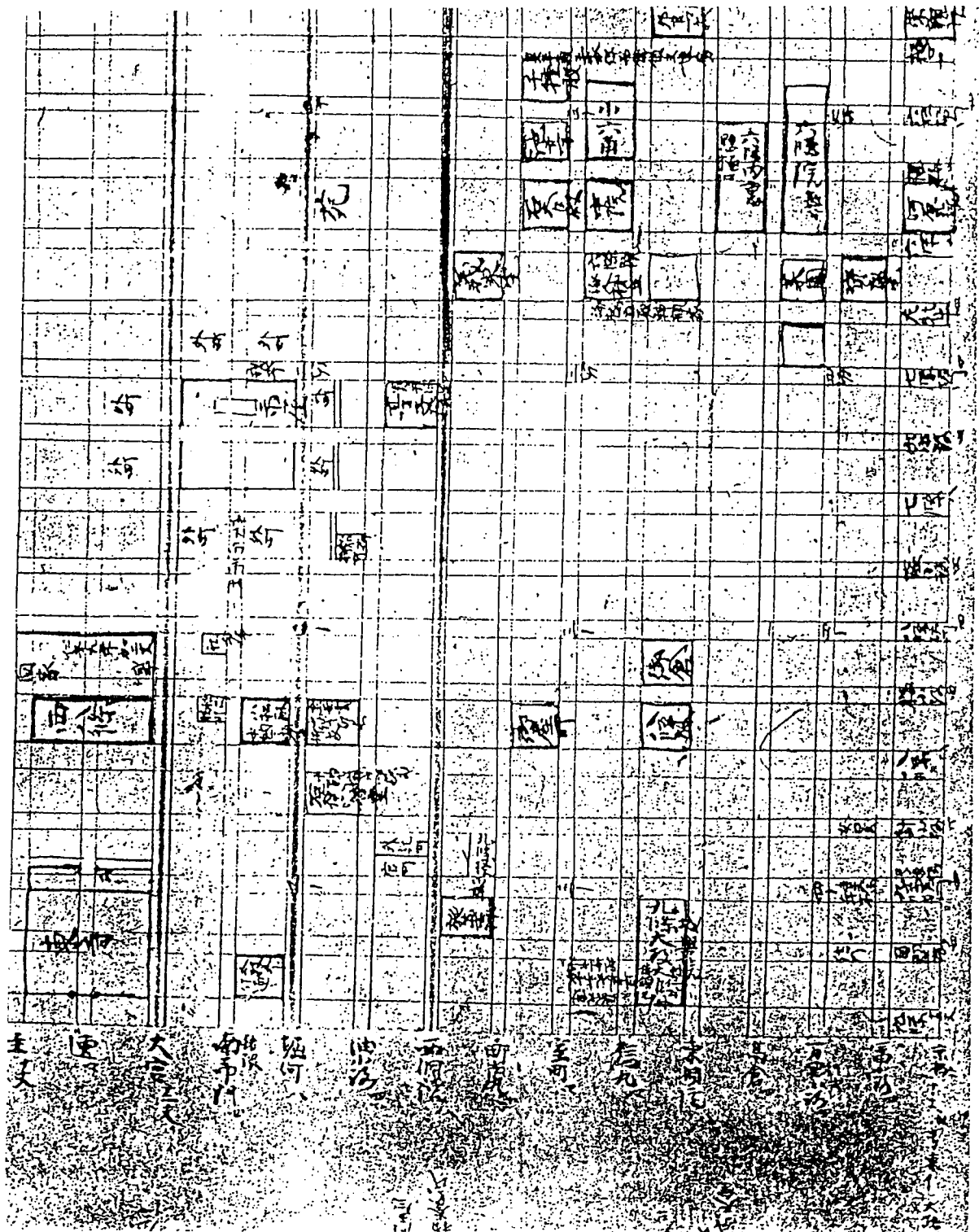
平安京の条坊と調査位置



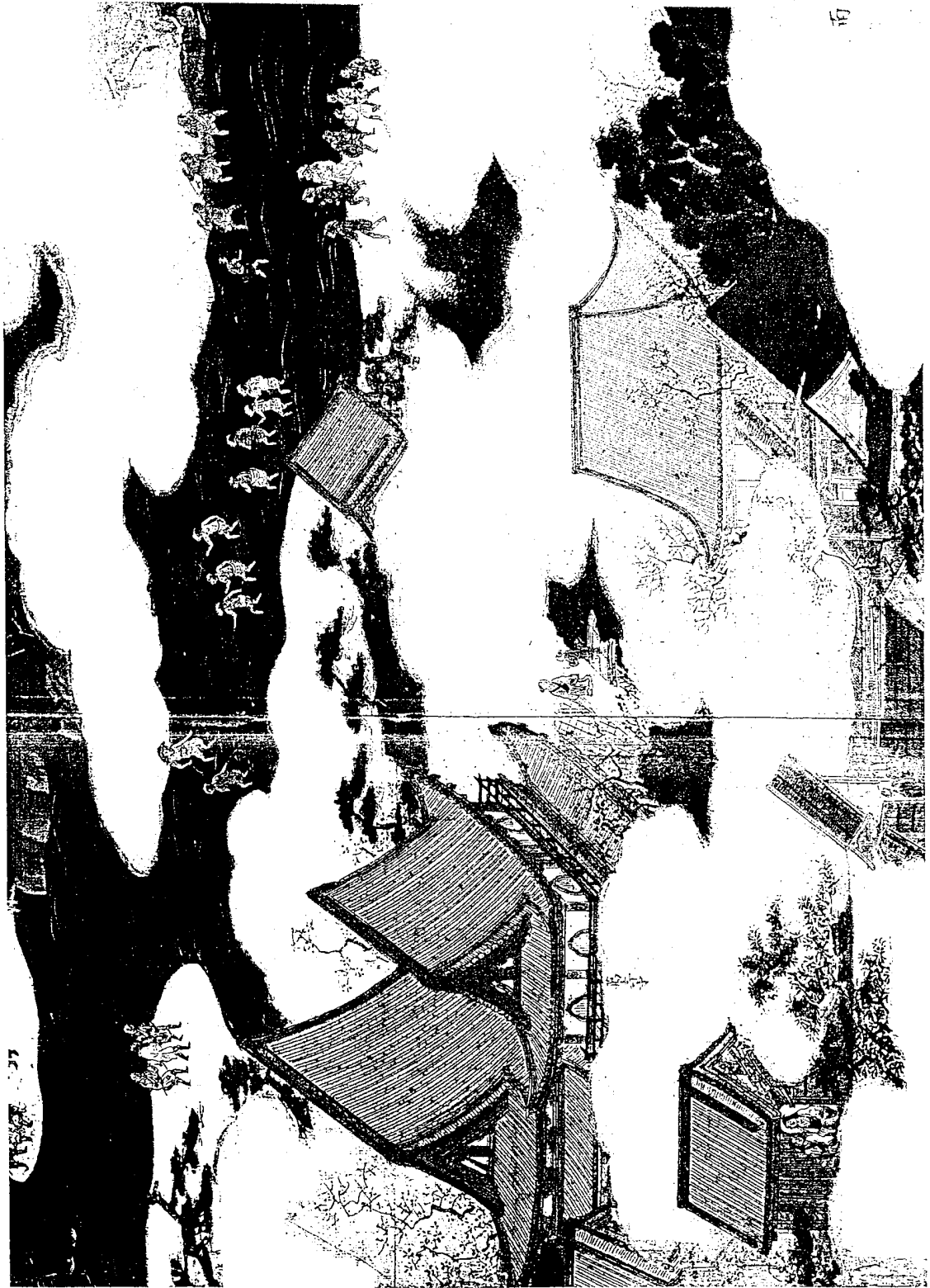
調査地付近の条坊復元図



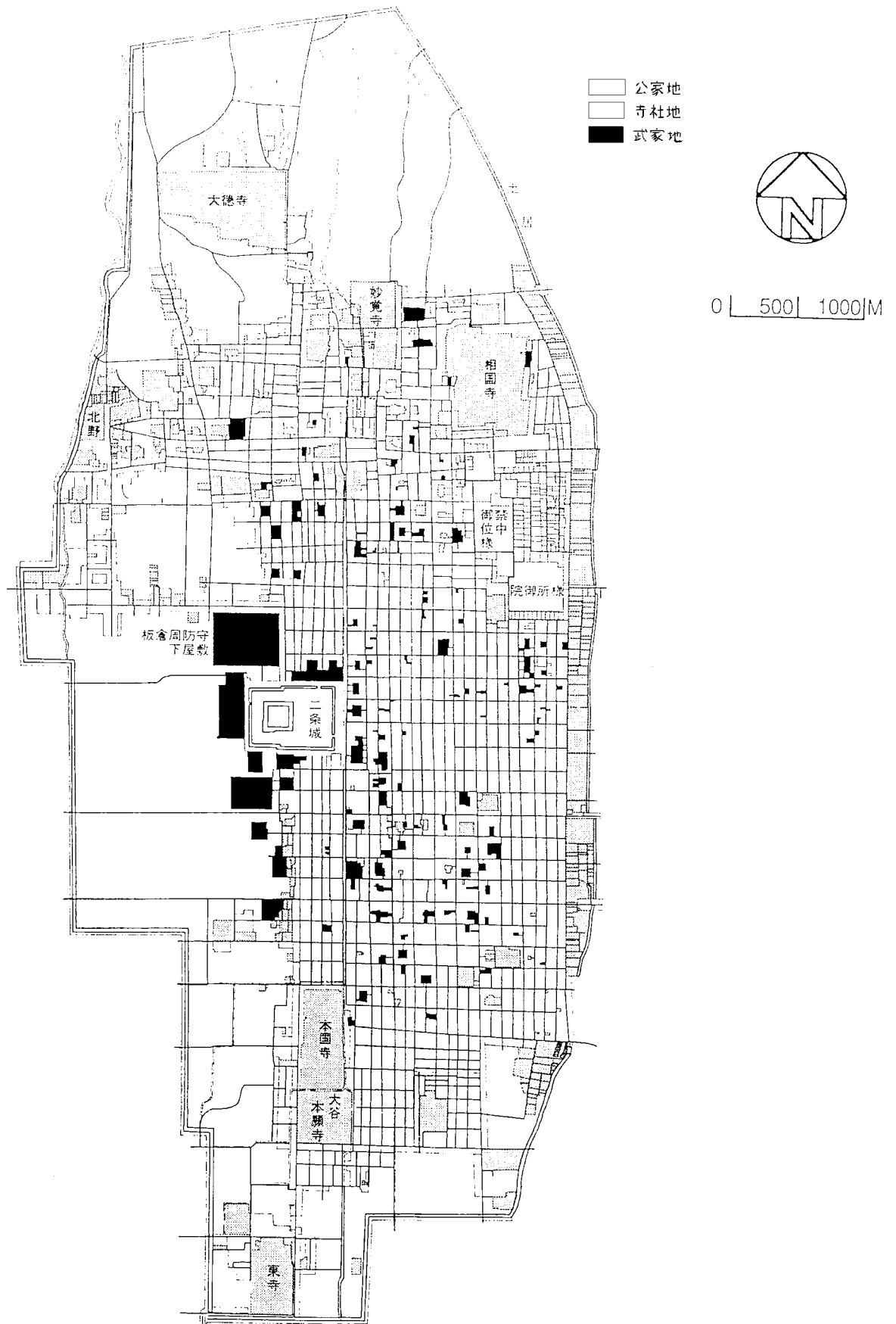
左京六条四坊十一町の西行八門と調査位置



『九条家本延喜式』所載京域図

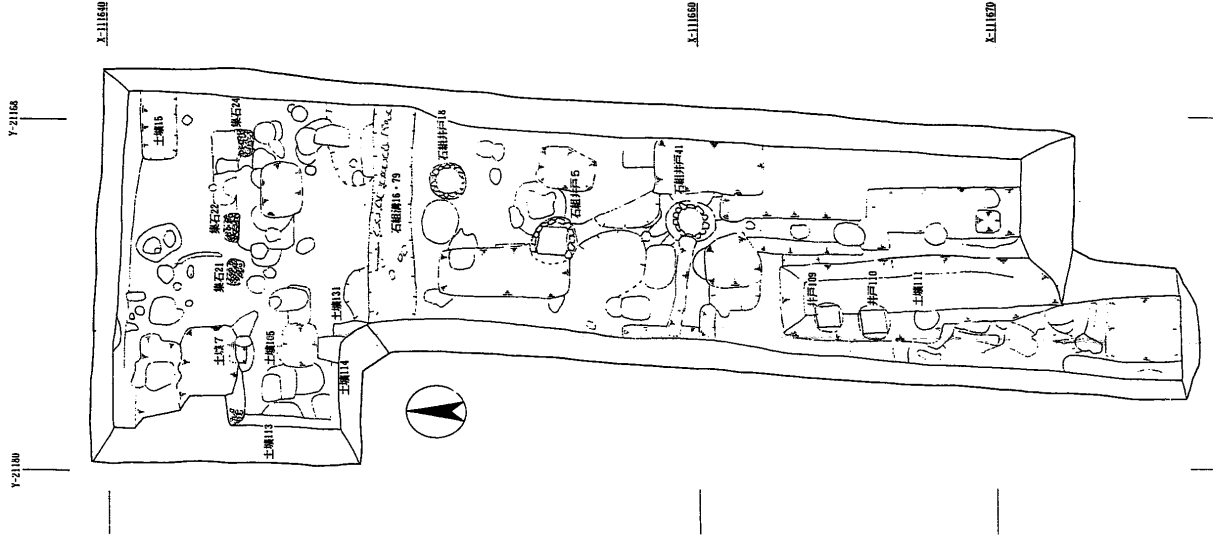


上杉本洛中洛外図

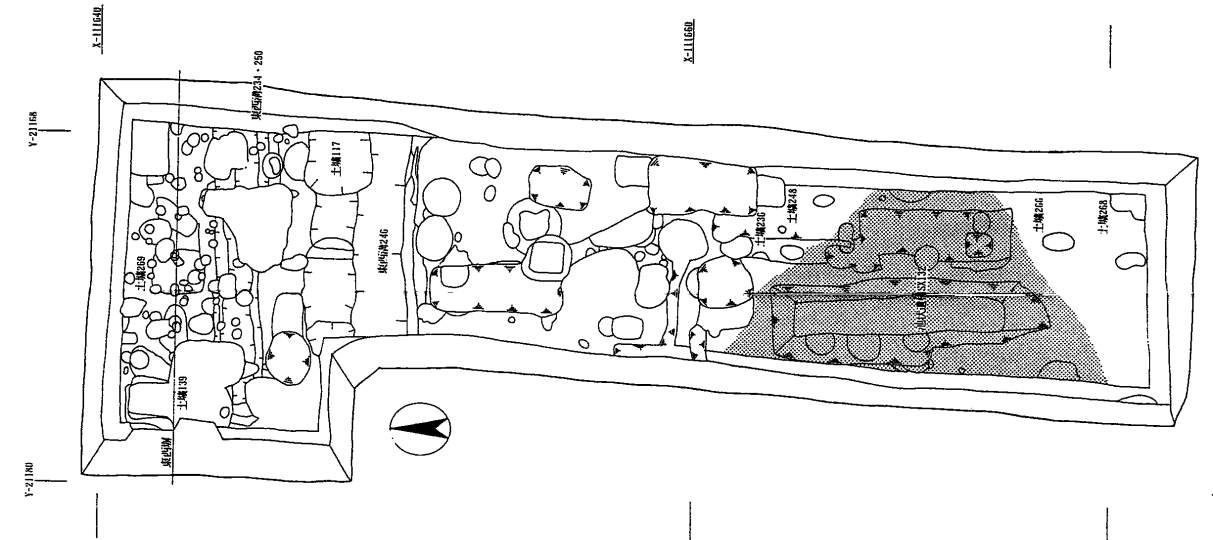


『図集日本都市史』所載寛永期の京都

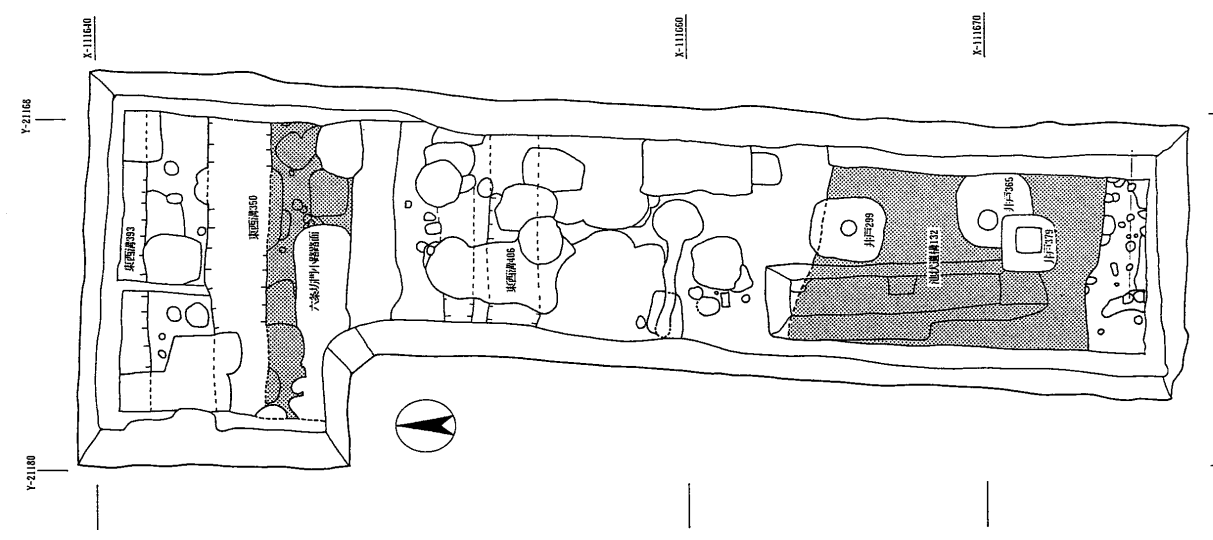




調査区遺構配置図（平安時代）



調査区遺構配置図（中世）



調査区遺構配置図（江戸時代）